

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2020年6月13日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙 吉田豊（拉致問題の取材を続けてきた記者）		
検証テーマ：オープニング、トランプ大統領が支持者集会を延期、【特集】横田滋さんと死去めぐみさんの消息 【特集】朝鮮女子挺身隊～苦難の人生		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ステップ3初の週末 ・夜の街で新指針 ・オープニング ・新型コロナで東京で新たに24人の感染者 ・中国北京市で第二波の疑い ・活発化する梅雨前線と土砂災害への警戒も ・イギリスの人種差別抗議にチャーチルも標的に ・藤井七段が「王位」挑戦権をかけた勝負 ・トランプ大統領が支持者集会を延期 ・新幹線新型N700Sが初公開 ・埼玉県和光市で車中から男性の遺体が発見された事件で詐欺グループの男性を逮捕 ・フロリダ州の大型マーケットで抗議デモに乗り公然と略奪がなされる ・【特集】横田滋さん死去とめぐみさんの消息 ・【特集】朝鮮女子挺身隊～苦難の人生 ・スポーツ報道 		
<p>放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープニング：結論→特に問題なし 番組の冒頭で金平キャスターが「ええ、コロナで困っている中小企業などを助ける持続化給付金の支給を委託された団体が実態がないのではないかと批判を受けて報道陣に事務所を公開しました。その時は5人の職員がいましたが、翌日、抜き打ちで訪ねてみたら、事務所はなんともぬけの殻でした、こんなひどいことが起きているのに国会を閉じていいんでしょうか。」とコメントしていた。このシーンに当てられたのは24秒で放送法上は特に問題は見られなかった。 ・トランプ大統領が支持者集会を延期：結論→特に問題なし ナレーションによって「アメリカのトランプ大統領は来週19日にオクラホマ州で開催する予定だった大規模な支持者集会について開催を一日延期すると発表しました。6月19日は1865年に当時のリンカーン大統領が奴隷解放を宣言した記念日で各地で人種差別に対する抗議デモが続く中、同じ日に11月の大統領選挙に向けた支持者集会を再開することに批判が高まっていました。」とのことが伝えられた。 このトピックに当てられた時間は31秒で放送法上は特に問題は見られなかった。 ・【特集】横田滋さんと死去めぐみさんの消息：結論→特に問題なし 		

スタジオでの膳場キャスターの「特集です。北朝鮮に拉致された横田めぐみさんの父、横田滋さんが先週なくなりました。報道特集は、めぐみさんの消息を追い続け、その情報横田夫妻に伝えてきました。」、日下部キャスターの「進む家族の高齢化。拉致問題を進展させるためには、どうしたらいいんでしょうか。」とのコメントを受けて、以下に朱記したような VTR が取り上げられた。

ナレ「拉致被害者家族会の前代表、横田滋さんの死去を受け、今週火曜日、家族が記者会見に臨んだ。」

横田早紀江さん「お父さん天国に行けるんだからねって言いましたね。私が今度行く時は、忘れないで待っていてね、大きな声で言ったら、ちょっと、こう、片目を開けてですね、うっすらと涙を浮かべたような感じで。それからずっと眠るように・・・」

ナレ「滋さんは、1977年に北朝鮮に拉致された娘のめぐみさんを、救出活動が続けてきた。」

めぐみさんの弟 横田 拓也さん「私は子どもとしてですと、金正日は許せないと、こうしてこうしてボコボコにしてやりたいみたいなことを、父にお酒を飲みながら話したことがあるんですが、珍しく父は、その時に、そんなものでは済まされないと聞いたことがありました。」

横田早紀江さん「体もだんだん弱くなってきますので、どこまで頑張れるかは分かりませんが、力のある限り、子供たちの力を借りながら、また先生方の力を借りながら頑張っていきたいと、思っております。」

ナレ「報道特集は、これまで横田めぐみさんに関する情報をいくつも入手し、滋さんと早紀江さんに、見てもらってきた。」

横田早紀江さん「そんなことがあるんですか。」 滋さん「このくらい合えば、間違いないんじゃないかと」

ナレ「昨日私たちは、拉致被害者蓮池薫さん取材した。新潟産業大学の経済学部准教授。日本に帰国した際に、横田さん夫妻からかけられた言葉が、忘れられないという。よく帰ってきてくれたという温かい言葉がですね、我々の存在というものを認めてもらえたような気持ちになりましたね。ほっとした。帰ってきて良かったんだなあという、そういう思いにさせてくれた要因の大きな一つが、横田夫妻の言葉だったかなと思いますね。」

ナレ「蓮池さんは帰国後、北朝鮮での恵さんの様子をよく二人に語った。」

蓮池氏「94年まで、同じところで、行き来しながら暮らしたと。ということです。」

日下部「これ色々、お話とかもされてたんでしょうけど」

蓮池氏「日曜日になれば、食事を一緒にしたり、手作りの麻雀もですね、一緒にやったり、夫婦が仲むつまじく散歩している様子、そういったものを、申し上げた時は、もうニコニコされながら、本当に、一言も聞き渡らないぞって感じですね、聞き入って嬉しそうな顔をされたり。」

ナレ「電話日朝首脳会談の際、横田めぐみさんが1993年に、死亡したと発表した。しかし蓮池さんは、1994年までめぐみさんと交流していた事実を明らかにして以降、94年死亡と説明を変えた。蓮池さんによると、めぐみさんは家族と引き離されて、病院にうつされたという。」

日下部「蓮池さんがね、めぐみさんと最後に交わした言葉みたいなものを覚えてらっしゃいますか？」

蓮池さん「めぐみさんが日本のことをこう言うわけですよ。『日本に帰りたい』ていうようなニュアンスで、言うんです。だからまあ絶望感が漂ってるんですよ皆さん。みんなの中で絶望感漂ってる中でも、生きていかなきゃなんないと。とにかく生きて何かが起きるだろうと、そういう思いはですねめぐみさんは強かった。彼女のその時の状況からして、北が言うようなことはない。自らなんて絶対にありえない。」

ナレ「2004年のソウル。報道特集はある脱北者を取材した」

脱北者 南光植氏(字幕)「ここにアパートが三つある。名称はアンサン招待所。日本人拉致被害者がいるところがこの建物。」

ナレ「南光植氏。かつて平壤の防衛司令部の幹部や、貿易会社の副社長を務めた。日本政府から話を聞かれたこ

ともあるという。」

"南氏（字幕）「この女性です。」

記者「どこで、いつ？」

南氏（字幕）「アンサン招待所です。」 "

ナレ「横田めぐみさん、さらに増元のみ子さんを見たという。二人がいた招待所は、南氏が指導していた工場の隣にあり、目撃したのは 1996 年だったという。」

南氏（吹替）「朝出勤するところ、それから外出して帰ってくることも何度か見ました。この女性は特別によく覚えています。党の待機車というのがあります。ベンツの待機車。それに乗って仕事場に向かうのです その姿をよく見ました。」

ナレ「南氏は女性二人の役割についても、情報を得ていた。」

南氏（吹替）「彼女の世話をしていた女性によると、南への工作部門で、金正日総書記のために日本料理を作ったりもしているということでした。また金正日総書記の誕生日である 1998 年の 2 月 16 日に『あの人たちはまだいるか』と聞くと、『まだいると言っていました。』

ナレ「この証言を得た直後、滋さんと早紀江さんに映像を見てもらった。」

滋さん「確認するという事までは、なかなかいかないのかもしれませんが、やっぱり、これが、本当で合ってくれば、北朝鮮側の発表である 93 年に死亡しているという前提が覆るわけですから、それはもう、これが本当であってほしいと思います。」

早紀江さん「こういう形で話して、話してられるのを見たのは初めてなんで、そのことが本当だったらいいなっと思っていますね。生きているっていう証拠になりますからね。はい」

ナレ「報道特集は、目撃証言以外にも、横田めぐみさんに関する有力な情報を手に入れた。それは、平壤住民 210 万人分の個人データだ。データは 2005 年当時のものとされている。マイクロソフト社のデータ管理ソフト、アクセスに入っていて、名前からの検索も可能だ。」

ナレ「平壤に住んでいた複数の脱北者に会い、自分や家族、親族などを、検索してもらったところ・・・」

脱北者の女性（吹替）「あった。ここにあった。私の叔母です。でました。軍隊に行っている兄の妻の弟です。」

ナレ「名前と生年月日、出身地、現住所、職業、血液型、市民章番号など、びたりと当てはまる情報が出た。」

ナレ「また、朝鮮中央テレビの看板アナウンサーとして知られるリ・チュンヒ氏や、日本人拉致に関わったとされる作業員、辛光朱容疑者などの名前を検索すると、これも一致した。」

テロップ「住民データ めぐみさんの消息は・・・」ナレ「日本人拉致被害者の朝鮮名や、生年月日など、データをつぎつぎと検索する中で、横田めぐみさんの生年月日である 1964 年、10 月 5 日を検索してみると、ハン・ソネという名前が出てきた。」

データ「ハン・ソネ。生年月日、1964 年、10 月 5 日。居住地、大城区域ミサン 3 洞。結婚相手、キム・ヨンナム。」

ナレ「配偶者は横田めぐみさんの夫であるキム・ヨンナム氏と同じ名前だ。さらに、娘のキム・ウンギョンさんの名前で検索してみたところ・・・」

データ「キム・ウンギョン。居住地、大城区域ミサン 3 洞。金日成総合大学学生」

ナレ「横田めぐみさんで見られる女性、ハン・ソネが住む大城区域ミサン 3 洞にキム・ウンギョンという名前の女性が住んでいた。年齢や 2005 年当時に、金日成総合大学の学生だった点も、めぐみさんの娘と一致している。そして与えられた市民証の番号も、1 番違いとなっていた。めぐみさんの血液型や、ウンギョンさんの生年月日などで、食い違いもあるが、一致する点が多い。」

テロップ「住民データに横田さん夫妻は」ナレ「私たちは、この住民データを滋さんと早紀江さんに見てもらった。」

記者「横田めぐみさんと同じ生年月日で、夫はキム・ヨンナムさんである人物。ハン・ソネさんという人物がいたんですが、その人と同じところに暮らしているキム・ウンギョンさんという人物がいて、それで市民証の番号が、そのハン・ソネさんと続き番号であるという、こういう事実」

早紀江さん「はあー、そんなことがあるんですかー」記者「あります。データでこうやってみるの初めてでしょうね。」早紀江さん「見たことないです。本当に初めてです。」

滋さん「一人の人で朝鮮名の名前をいくつも使っているわけですね。だからこれ（ハン・ソネという名前）を使っていたのかもしれない。我々が聞いた名前は2つか3つか、聞いたことがあるね。これくらい合えば、間違いないんじゃないかと。2005年の段階ですけど、生存していたんだろうなっていうふうに思います。」

ナレ「この住民データについては、日本政府も入手していることが、政府関係者への取材で分かった。しかし、横田さん夫妻への説明はなされていなかった。」

滋さん「かなり信憑性があったとしても、それを動かすことができないようだったら、何も結局家族には伝えないんじゃないかなって思います。」

早紀江さん「外務省・警察・対策本部の方も、みんないらっしゃるときに、『分かっているんじゃないですか』と言った事はありますね。それを何も言わないで、言えないことなんだろうけど、言えなくて、家族の者を黙って、しら一つと眺めていらっしゃるんだとしたら、本当にこれはものすごく残酷な話ですね。と思いますよといった事はあります。」

ナレ「娘の消息に関する情報を政府から知らされないことへの憤り。」

ナレ「その前の年に開かれた集会。拉致問題担当大臣や、神奈川県知事もいる席で、滋さんはこんな発言をしていた。

滋さん「制裁ってことはもちろん必要なんだけど、やっぱり交渉しなければ、あの一解決しない。北朝鮮に終戦のときに遺してきた遺骨を収集したいってことを申し入れるとか、それから、日本人妻の帰国をさせるってことを計画しているとか、いろんなことで、まずはパイプを作って、それをまあ拉致の解決につないで行きたい。」

ナレ「家族や支援団体が、北朝鮮への制裁強化を政府に求める中、一線を画した発言だった。3年前、拉致問題に取り組む特定失踪調査会が、北朝鮮に向けて発信するラジオしおかぜの公開収録を行った」

ナレ「この時、北朝鮮にいるめぐみさんに向けて、横田夫妻が呼び掛けたメッセージも紹介された。滋さんは・・・」

滋さん「めぐみちゃん。めぐみちゃんが帰ってくるのを楽しみにしてたんだけど、早くそれが来ることが望まれます。」

ナレ「めぐみさんとの再会を果たすことができなかった滋さん。その死を特定失踪者問題審査会は北朝鮮に向けて、発信した。」

男性「横田めぐみさんのお父さん、横田滋さんが老衰のため、87歳で亡くなりました。めぐみさんこの放送をお聞きでしたら、お父さんは最後の最後まで、めぐみさんのことを諦めなかった。そのことを是非ご理解ください。」

ナレ「過去に放送した滋さんのメッセージも、再び流した。」

滋さんのメッセージ「めぐみちゃんお父さんです。めぐみちゃんは元気にしていますか。今年こそこちらの方に帰ってくるきっかけができるんじゃないかと思いますので、本当に楽しみにしておいてください。じゃあ元気で。」

特定失踪者問題調査会 荒木和博代表「ともかくご本人が日本に帰れる、帰りたいという思いをしっかりと持ち続

けていただくと、 いうことがいちばんだと思います。」

c m

ナレ「先週金曜日に亡くなった 横田滋さん。拉致被害者家族の高齢化は進んでいる。拉致被害者有本恵子さんを去年 5 月に訪ねた。」

膳場「今日は TBS です。ご無沙汰しています。」

ナレ「夫、 明弘さんが出迎えてくれたが、妻佳代子さんは、 横になっていた。」

膳場「しんどいですか？」 嘉代子さん「ものすごいえらい（しんどい）です。」 膳場「は一そうですか。」 嘉代子さん「その日によって違いますからね。」 膳場「ええ。お腹に水が溜まられたって。」 嘉代子さん「あの一あの子は帰ってくるまで、命が持つかと思って。そればかり思いますわ。」

ナレ「横田早紀江さんから 10 日に 1 度に電話があり、励まされていると話していたかよこさん。今年 2 月、94 歳で亡くなった。」

ナレ「先週、横田滋さんが死去したことにより、拉致被害者の親の世代が、有本明弘さんと横田早紀江さんの二人となった。膠着する日朝関係をどう動かすのか。蓮池薫さんは」

日下部「活動のね、大きな柱だった滋さんが亡くなったこと。これからこの活動を進めていったらいいのか。」

蓮池薫さん「やはり北朝鮮当局者が決断をするしかない。決断をさせるためには、何が必要なのか。まずは日本政府が、今安倍総理がおっしゃっているように、何の条件もなしに会うぞと、お会いしましょうと。会って話す内容も、ある程度明確化されてますよね。」

ナレ「蓮池さんは、米朝関係改善の流れを、日朝関係の進展につなげる道筋を描いていたが、その動きがしぼんだ今は、別の戦略も必要だと話す。」

蓮池薫さん「親御さんとして残ったお二人、間に合うのかっていう話ですよ。そうしたならば他に方法を考えていくべきだろうと、思う。『関係改善しましょうよ』という日本の強い意志。安倍総理の意思がですね、金正恩委員長に伝わって、そして、腹を割って話してみようかと。それしかない。そういう方向に持っていく上で、更なる努力って言いますかね。見えないからもどかしいんですよ。政府が動けば世論が盛り上がるんですよ。政府に何も見えないと、世論はダメなんじゃないと私募不可能性がある。お互い 二つの要素がうまくやっていけば、北動かすことは不可能じゃない。」

VTR を受けて、スタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り広げられた。

膳場「拉致問題の所在を続けてきた吉田記者です。恵さんに会えないまま亡くなられた横田滋さん。どれだけ胸の思いだったかと思えますけど。本当に力を尽くされましたね。」 テロップ「亡くなった横田滋さん めぐみさん救出への思い」

吉田記者「そうですね。・茂さんは優しく謙虚な方なんですが、めぐみさん救出にかける強い思いというのをいつも私感じてました。最初めぐみさんが北朝鮮にいることが伝えられた際にですね、家族の反対を押し切って実名の公表に踏み切ったのは、滋んです。その決断がなければ、大きな運動にはなりませんでしたし、蓮池さんら 5 人が帰ってくることもありませんでした。早紀江さんは先ほど、JNN の取材に対し、お父さんは大変なことを全部やり遂げて立派だった。天国に行くと確信していると話しています。」

金平「僕はね、2014 年に、茂さんがモンゴルでめぐみさんの娘さんですね、キムウンギョウさんに会われた時、とっても嬉しそうな表情をしていたのをよく覚えていますけども、その滋さんにめぐみさんの情報を伝えた時の様子っていうのは、どうでしたか？」

吉田記者「はい、実は極めて慎重でした。本当かどうかこれだけではわからない。という言い方が多かったように思います。ただ娘の消息につながる情報が、伝えられるのはやはり嬉しそうでし、期待も顔ににじみ出て

いました。北朝鮮は世界一情報統制が厳しい国です。そんな中脱北者から、情報を得て、記者として少しでも家族の方々の力になりたい。という思いで取材を進めてきたんですが、再開が叶わずお亡くなりになられたのが本当に残念です。」

日下部「あの一蓮池さんも指摘してましたけれども、今後拉致問題どう動かしていくのか、難しいものがありますよね。」

吉田記者「拉致は日本の主権を侵害した、北朝鮮の国家犯罪です。日本国民は怒りもあり、与論は非常に厳しいものがあります。しかし圧力はもちろんながら、交渉しなければ解決しないと、おっしゃってました。私が以前報道特集で紹介したある家族は、日本の官僚も政治かも、そして北朝鮮も、みな拉致被害者や家族が死ぬのを待っているのではないかと、言っていました。このままだと本当になってしまいます。拉致認定がされていない方々。特定失踪者の問題も含めて、本気で取り組んで欲しいと心から思います。」

この特集に当てられた時間は 1382 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

【特集】 朝鮮女子挺身隊～苦難の人生：結論→特に問題なし

膳場キャスターの「さて、次の特集です。いわゆる徴用工問題を巡って日韓関係は以前冷え込んだ状態が続いています、その徴用工のように過酷な労働をさせられた女性たちがいました、朝鮮女子勤労挺身隊、一体どんな人生を歩んだのでしょうか。」とのコメントを受けて、以下に朱記したような特集の VTR が取り上げられた。

"ナレ「改善の糸口が見いだせない日韓関係、その最大の原因になっているのが。」

安倍総理「今般の判決は国際法に照らしてありえない判断であります、日本政府としては毅然と対応してまいります。」

ムン・ジェイン大統領「日本も解決策を示し、韓国と知恵を集めて考えるべき。」 "

"ナレ「戦時中、朝鮮半島から強制動員され、炭鉱やトンネル、軍需工場などで過酷な労働を強いられた徴用工問題。日韓で司法判断が分かれ、救済がなされていない。そして、当時、朝鮮半島から日本に渡り、過酷な労働をさせられていた女性たちがいた。」

「その頃の苦勞は口では言い表せません、学校も卒業できないで連れて行かれたのだから。」

ナレ「彼女たちは朝鮮女子勤労挺身隊と呼ばれた。」

「私はまんまと騙された」

ナレ「どういう経緯で日本に渡り、どんな人生を歩んできたのか。」 "

"ナレ「韓国ソウル、古びた住宅街の一択でかつて日本で過酷な労働をさせられた元朝鮮女子勤労挺身隊の女性が暮らしていた。金正珠（キムジョンジュ）さん 88 歳。数年前からパーキンソン病を患っている。」

キムジョンジュさん「よかったことなんて一つもありません。悪くあったことだけ思い出すし、日本と聞くだけで涙が出ます。辛かったことだけです。」

ナレ「今から 75 年前の 1945 年 3 月、13 歳の時に朝鮮半島から富山に渡り、工場で働かされた。」

キムジョンジュさん「私は今でも背が低いけれども当時も背が低くて、こうやって高い踏み台を 2 つおいて、その上に立って、こんなに大きな旋盤の仕事をミリ単位でやりました。こんな刃があつて、機械でこう挟んで、」

ナレ「仕事は朝七時から午後五時まで、休みは月に一日しかなかった。工場では常に見張られていたという。」

キムジョンジュさん「工作中、朝とか昼とか、トイレに行ったら監督がいるんです、日本人の男の人たちが 30 代 40 代の人たちが見回って、いなかったらどこに行っていたんだと、トイレに行くと言ったらその人がトイレにまでついてきます、ちょっとトイレから出てくるのが遅いと、どうして今出るのが遅い、と頬を叩くんです。」

"

"ナレ「過酷な労働をさせられた朝鮮女子勤労挺身隊。なぜ日本に渡ることになったのか。終戦間際、戦況は厳しさを増し、男性は次々と戦場に駆り出された、国内の労働力が逼迫すると政府は 1943 年、14 歳以上の未婚の日本人女性を対象に志願という形で動員をはかることを決めた、翌年には植民地だった朝鮮半島でもその方針を適用した。当時、現地の新聞はこう報じている。」

現地新聞「これは決して徴用ではなく、国を愛する真心から進んで志願して出るのを望みます。」

キムジョンジュさん「日本人のオオガキ先生がお姉さんを 1 年前に名古屋三菱に送り、その後、私を学校も卒業させないまま、中学高校にも通えたと嘘をついて、不二越に送ったんです。」

ナレ「これはその頃日本で撮影された朝鮮女子勤労挺身隊の集合写真だ、終戦までに 3000 人から 4000 人が日本に渡ったという。彼女たちを最も多く受け入れていたのが、富山市の機械メーカー不二越だ。現在も市の中心部に製造拠点があり、グループ会社も含めるとおよそ 7500 人が働いている。戦時中は飛行機の部品なども製造し、国の軍需工場に指定されていた。社史には 1944 年からおよそ 1 年間で 1089 人を受け入れたとある。」 "

"キムジョンジュさん「これは私の命と同じものです、日本の不二越に行って仕事をした。学校の記録簿です。」

ナレ「小学校の学籍簿にはキムさんが不二越に動員され記録があった。工場で働くようになると軍歌を歌わされるなどしたという。」

キムジョンジュさん「皇国臣民の誓い、君が代は千代に八千代に、必ず朝出勤するときは唱え、工場に行くときは『勝ってくるさと勇ましく』この歌を歌いながら出勤しました。また、寮に戻るときも『勝ってくるさと勇ましく』この歌を歌いながら戻りました。」

ナレ「終戦間際、富山市も米軍の空襲を受けたがキムさんらは逃げ出すこともできず、寒さや飢えに耐えながら毎日飛行機の部品を作らされた。家族に手紙を出すことも許されなかったという。」

キムジョンジュさん「純情な 13 歳から 16 歳の若い子たちが全羅道だけでも何百人と生きました。奴隷生活でお腹が空いて、草をむしって食べて、髪がみんな抜けて、そんな生活で給料が一度ももらえませんでした、その頃の苦労は口では言い表せません、学校も卒業できず連れて行かれたのだから。」 "

"ナレ「元、朝鮮女子勤労帯の女性たちが不二越に謝罪と未払い賃金の支払いなどを求めて日本で裁判を起こしたのは 1992 年、一審、二審ともに賃金の未払いと過酷な労働を認定したが、いずれも時効を理由に訴えを退けた。その後、最高裁で 2000 年に和解が成立。不二越の当時の社長は会見で買う話した。」

井村健輔（不二越社長、2000 年当時）「第二次世界大戦における過去の事実をめぐる極めて不毛な争いを今後継続するという事は当事者双方にとって不幸なことであると考えました。」

ナレ「2003 年、一次訴訟に参加していなかったキムジョンジュさんら 22 人は被告に国を加え、不二越を訴えた、一審では親の同意を得ずにつれてきた強制連行の事実と過酷な労働を強制した事実を認定。二審では更にただ働きも認めたが日韓請求協定を理由に原告敗訴となった。最高裁も上告を退けた。日韓請求権協定とは 1965 年の日韓国交正常化の際に結ばれた q 協定だ。そこには日本が韓国に経済協力資金として無償 3 億ドル、有償 2 億ドルを提供することと両国およびその国民の間の財産や請求権に関する問題が完全かつ最終的に解決されたことが明記されている、しかし帰国した元挺身隊の女性たちが、その後この資金によって補償を受けることはなかった。諦めなかったキムさんたちは 2013 年に韓国で不二越を訴えた。ソウル中央地裁は植民地支配のもとで少女を過酷な条件で働かせたことは不法行為であり、その損害賠償は日韓請求権協定の対象外と判断。不二越に対し、原告 1 人あたりおよそ 1000 万円の損害賠償を命じた。さらに、韓国の裁判所は去年 3 月、韓国国内の不二越の資産の差し押さえを認めた、原告側は現在、売却に向けて手続きを続けている。朝鮮女子勤労挺身隊として働かされたキムジョンジュさん、終戦後、母国に戻ったあともつらい日々が続いたという。挺身隊だったことを理由に差別的な扱いを受けたのだ。」

キムジョンジュさん「私達は韓国で頭を上げて歩けませんでした。罪もないのに路地だけを潜れて歩いたんです。大通りを歩けなかったんです。」

ナレ「19歳で結婚したキムさんは3人の子供に恵まれたが挺身隊だったことが夫に知られると、暴力を振るわれ、離婚された。この理由についてキムさんは日本の裁判でこう述べている。」

キムジョンジュさんの供述(音声)「夫は私が挺身隊として日本に行ったことを従軍慰安婦として行ったのだと思い込んだのです。挺身隊として働いたという事実は韓国では肉親に話すことさえもためられるくらい、従軍慰安婦と混同されており、誤解を受けることなんです。」

"ナレ「日本で裁判を起こしたあとも、周囲から冷たい目で見られたという。」

キムジョンジュさん「裁判のたびに韓国人からは金をせびりに行くのかと罵声を浴びました。」

ナレ「帰国後もつらい思いをした元挺身隊の女性たち、戦時中、一体誰がどのように彼女たちを勧誘したのか。13歳の時に志願し、挺身隊として不二越で働いたイ・ジャスンさんは学校で日本人の教員からある映画を見せられたという。」

イ・ジャスンさん「そのとき、挺身隊に行った人たちが働きながら楽しそうに勉強もして、生け花をするのも見せてくれました。そして寝泊まりする宿舎もきれいで若い子たちが好感を持つような内容だったのです。だからみんなそれに惑わされたんです。」

ナレ「小学五年生のとき日本に渡った日本のチュ・クミョンさんは給料が高いと誘われた。」

チュ・クミョンさん「日本に行けばこんないいことがあるっていうんです。それで私は日本に行けばお金が稼げると思い、両親が年をとっているから志願したんです、行くって手を上げたんです。」

ナレ「元挺身隊の多くは小学校にあたる国民学校で教員から勧誘を受けたと話す。当時、朝鮮半島南東部の大邱にあったタルソン国民学校で教員をしていた日本人女性が今も健在だった。富山市の杉山とみさん、98歳。」

杉山とみ「これ、あの、韓国人の子どもたちです、私が務めたのがそのタルソン国民学校というのが韓国人の小学校だったので、で、その中にパク・ソトクという女子挺身隊に行った子供がいました。」

ナレ「パク・ソトクという女の子は杉山さんが研修で学校を離れている間に別の教師に勧誘され、13歳という若さで不二越へ送られた。」

杉山とみ「担任の先生にひどいじゃないか、こんな幼い、まだ子供なのに、その子を遠い、それも内地の富山県の工場へ送って仕事をさせるなんてあまりにもひどすぎる、そしたらその勧誘の言葉の中に入ったら勉強もできるし日本の伝統の生花とかなんかも、そういうことも習うことができるからお愛おしくて、なお悔しいです。私にしてみたら、あんないい子が。」

ナレ「朝鮮総督府の機関誌として発行されていた新聞には挺身隊を募る政府の公告が踊り現地からの手紙や報告としてこんな記事が連日掲載されていた。」

記事「はや、こちらに来てふたつきになりました。内地の皆さんの優しいお導きで本当に楽しく元気で働いております。」

"ナレ「当時、杉山さんの周囲でも同僚の教師たちが勧誘していたという。」

杉山とみ「先生は本当に熱心に勧誘したと思います。そして一人でも多くなったら、それが手柄になった、誰も現場をわかっている人は誰ひとりいないんです、それが勧誘するんですから。」

ナレ「朝鮮半島からの強制動員について研究している東京大学外村大教授はこう話す。」

外村大(東京大学教授)「非常に実は成績優秀な子たち、まあ成績優秀っていうのは当時の朝鮮、植民地下の朝鮮の教育ですから、まずやっぱり日本語が非常に良くできたということと日本帝国のやっていた施策ということそのまますべて信じていた、まあいわば皇国臣民として模範的な人たちとなっていた女性たちが選ばれた、と。」

"ナレ「元挺身隊の女性たちは戦後 75 年を経てみんな 90 歳近くになっている。彼女たちを支えてきた富山市に住む中川美由紀さん。およそ 30 年にわたって日韓を行き来し、支援してきた」

アンヒスさん「中川さんがよくやってくれたおかげです。」

ナレ「中川さんはこう強調する。」

中川美由紀「お金の問題じゃないので、謝罪、日本がきちんと謝罪するというのが基本なんですけれども、韓国の社会の中でひっそりと生きてきた彼女たちがちゃんと顔を上げて、その存在を認めてもらえる、彼女たち無くなる前に名誉を回復させたい、してほしいというのが私の思いです。」

ナレ「小学 5 年生のとき、朝鮮女子勤労挺身隊として不二越で働いたチュ・クミョンさん。」

チュ・クミョンさん「その頃を思い出すと涙が止まりません、本当に辛い生活でした。」

ナレ「不二越で働いていたとき、仲間内で謳った歌を今でも覚えていた。」

チュ・クミョンさん「不二越良いとは誰が言った、桜木陰の樹の下で、チンチムキムラが言ったそう。私はまんまと騙された。いや、私達が作って歌った。」

ナレ「韓国の裁判所が日本企業に賠償を命じたことについて、日本政府は、日韓請求権協定に明らかに違反し、日本企業に対し不当な不利益を迫らせるもので極めて遺憾であり、断じて受け入れることはできない、としている。」

ナレ「不二越は取材に対し、韓国の最高裁で当社の正当性を主張していく、と答えた。元朝鮮女子勤労挺身隊の女性たちが訴えている、辛い体験について聞くと、現在進行中の訴訟に付きまして、回答は差し控える、とした。」

特集の VTR を受けてスタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り広げられた。

"膳場貴子「取材をしました富山チューリップテレビの砂澤記者と中継がつながっています。砂澤さん、朝鮮女子勤労挺身隊の取材をしようと思ったきっかけは何だったのでしょうか。」

砂澤智史（チューリップテレビ記者）「はい、徴用工の問題を巡って韓国で反日感情が高まってきたころ、韓国の高校生が富山を訪れる交流事業が急に中止になりました。その取材の中で元挺身隊の女性を支援している中川さんと出会い、挺身隊の存在を知りました。自分の生まれ育った富山に挺身隊が最も多く動員されていたことで日韓の隔たりとなっている戦後補償の問題が実は身近な問題だったと知り、元挺身隊の彼女たちを取材したいと考えました。」

日下部正樹「彼女たちを取材してみてですね、彼女が本当に、彼女たちが本当に求めているもの、それは何だと感じました？」

砂澤智史「はい、今、彼女たちが求めているのは自らの名誉の回復と謝罪です。残念ながら女子挺身隊に関する公文書や資料が少なく幼い少女を騙して日本に連れて行った経緯や過酷な労働を裏付けるのは彼女たちの証言しかありません。しかし、彼女たちがいくら苦痛を訴えても日本政府や日本企業が認めない限りその証言が真実だとは公に認めてもらえません、元挺身隊はみな 90 歳前後になっています。残り少ない人生となった今、彼女たちが本当に欲しいものはお金ではなく、私達が悪かったという謝罪の言葉なのだと感じました。」

"金平茂紀「あの、砂澤さんね、過去に富山市議会の政務活動費の問題を取材されていましたがすけれども、改めてこの問題が問いかけているのは何だというふうに砂澤さんは思いましたか。」

砂澤智史「はい、この問題は日韓の歴史観や価値観が複雑に絡んでいてすべてを解決するのは非常に難しい問題です、ただ私達日本は、日本人は彼女たちを頼っておいてよいのか、解決済だからと言ってこのままこの問題に向き合わなくてよいのかということが突きつけられていると思います、それは同時に戦争が残した負の遺産や愚かさを改めて私達に伝えていると感じました。」

膳場貴子「富山から砂澤記者でした、特集でした。」

この特集に当てられた時間は 1540 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨
特に問題なし

検証者所感

【特集】 朝鮮女子挺身隊～苦難の人生

特集の VTR での外村大教授の「非常に実は成績優秀な子たち、まあ成績優秀っていうのは当時の朝鮮、植民地下の朝鮮の教育ですから、まずやっぱり日本語が非常に良くできたということと日本帝国のやっていた施策ということそのままだ信じていた、まあいわば皇国臣民として模範的な人たちとなっていた女性たちが選ばれた、と。」とのコメントが印象的だった。また、VTR では国民学校の教員の勧誘により「騙された」という論調が目立っていたが、そもそも「騙される」だけの素地が当時の朝鮮にはあったのではないだろうか。また、元朝鮮女子挺身隊の女性たちが、終戦後の韓国社会での元挺身隊であることへの差別などを語っていたが、そうした差別が何故起こったのか、ということも非常に興味深い。言い方は悪いが、元挺身隊の女性たちは「勝ち馬に乗りそこねた」という面もあったのではなかろうかと思う。

スタジオでは砂澤記者が「この問題は日韓の歴史観や価値観が複雑に絡んでいてすべてを解決するのは非常に難しい問題です、ただ私達日本は、日本人は彼女たちを頼っておいてよいのか、解決済だからと言ってこのままこの問題に向き合わなくてよいのかということが突きつけられていると思います、それは同時に戦争が残した負の遺産や愚かさを改めて私達に伝えていると感じました。」とコメントしていたが、こうしたコメントを聞くと、逆になぜ日本人がこの問題に向き合わねばならないのか、という疑問も感じてしまう。

言うならば、自分が借りているマンションの前の住民の不手際であるとか、同じ土地に以前立っていた別のマンションの管理組合の不手際のようなもの、とも言えるわけで、そうした問題になぜ関係のない自分たちが向き合わねばならないのか、ということである。

砂澤記者はよほど日本人であるとか日本国というものに強い思い入れがあるのだろうか、ということが伺えるコメントであった。